スラムに住む中流階級

—バンコク、クロントイ・スラムにおける「コンパウンド」の居住実態—

修士　正会員　庄司　栄介（芝浦工業大学）

0．はじめに

本研究は、スラムという古くて新しい問題を、住民の日常的な行為や近隣の共住関係の視点から考察するものである。

バンコクでは、1960 年代以降スラム人口が急増し、政策の対象となってきた。低所得者層向けの公営住宅建設や郊外移転などの政策が実施されたものの、住民の再定住地への定着率は低く、スラムの解消には至っていない。なぜスラムはなくならず、住民はそこに住み続けるのか。本研究は、この問いに居住者の視点からアプローチする。

スラムは、貧困や不衛生といった負のイメージや、社会的紐帯の強いコミュニティという正のイメージで語られ、排除や支援の対象となる。しかし、遠藤が指摘するように、都市の急激な変化の中で、スラム内部にも階層性が現れている(1)。2 世・3 世化、新型コロナウイルスの影響、さらには周辺国からの移民労働者の存在はそうした階層を揺れ動かしている。

複雑な様相を呈すスラムの居住実態を考える上で、親族関係を中心とした社会関係は重要である。Askew によれば、住民は単独で地域に入ることはほとんどなく、多くの世帯が相互に繋がりを維持している。家族や友人、仕事仲間などのネットワークが、スラム内に結束のある社会構造を形成している(2)。本研究では、このようなネットワークがどのように形成・維持・変化するのかを明らかにするため、親族が近接した住居において共住する「コンパウンド」に着目し、その実態を調査する。

社会関係と居住環境の関連については、水野の研究が参考になる。水野は、タイ東北部の村落を対象に、土地を媒介とした近親者による生産・消費の協同体を「屋敷地共住集団」と呼び、これが特定の社会・経済条件のもとで成立することを指摘した(3)。この視点は、都市スラムの居住動態を分析する上でも有効であり、本研究においても適用できると考えられる。

以上の背景を踏まえ、本研究は、スラム内の「コンパウンド」の動態を明らかにすることを目的とする。具体的には、「コンパウンド」がどのように形成され、どのような現状にあるのか、またどのように維持、解体されていくのかを分析する。物的・社会的環境、居住者の日常的行為やナラティブに着目し、スラムの複雑な実態を解明することを目指す。

調査としては、参与観察、居住空間の実測、3D スキャン、インタビュー、写真撮影を実施した。参与観察では約 1 年間、週 3 回ほど現地を訪れ、宴会などの社会的活動にも参加した（図 1）。写真撮影では空間の利用とその変化を分析するため、同じ位置・角度で定点撮影を行った。

図 1　筆者が参与観察している様子

調査対象地はクロントイ・スラムの Lock456 地区内の「コンパウンド」である（図 2）。クロントイ・スラムはバンコク最大級のスラムであり、1937 年頃、港の開発に伴い全国から労働者が集まり、不法占拠によって成立した。1980 年代には公営住宅の建設や区画整備が進められたが、Lock456 地区では区画整備は行われず、既存路地の補強や水道管、電柱の設置にとどまった。そのため、当初の湾曲した路地や住民の社会関係が維持されており、居住者による漸進的な居住地の変容がみられると推測される。

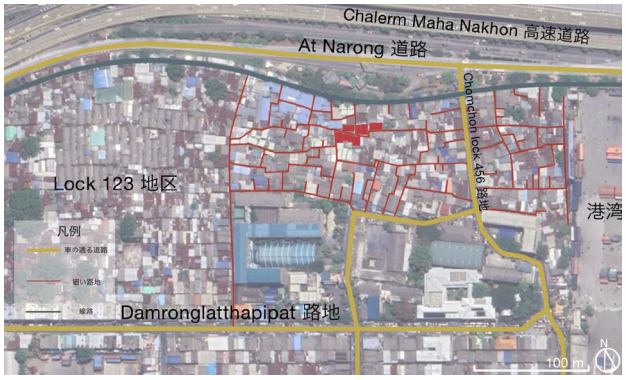

図 2　クロントイ・スラム、Lock456 地区

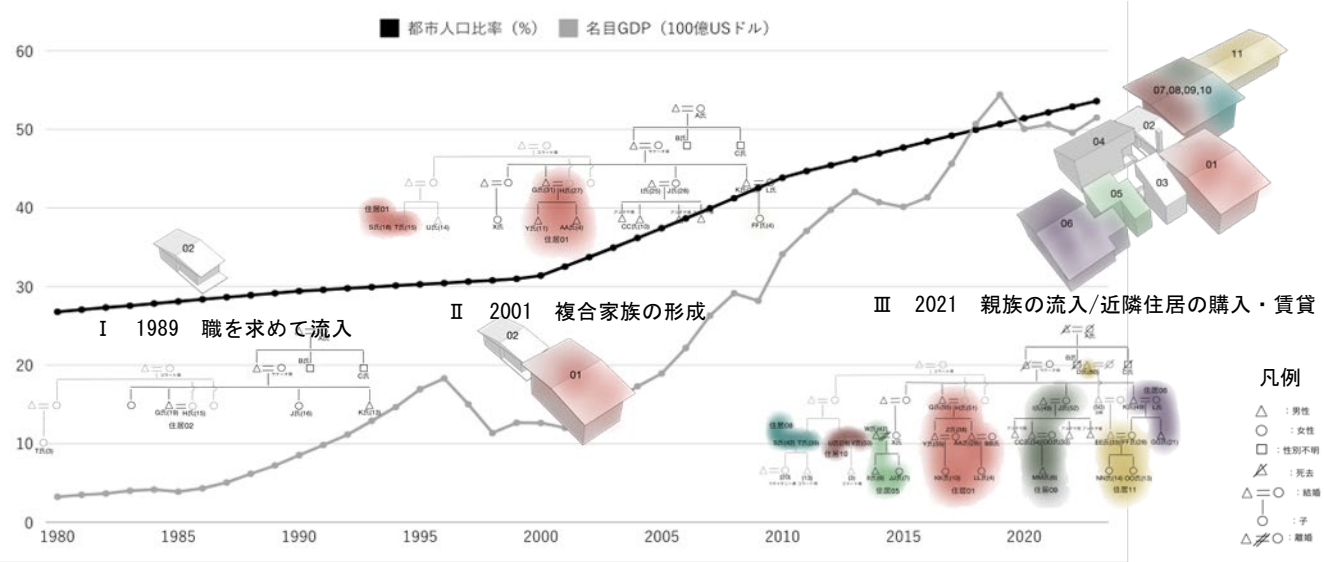

図３　「コンパウンド」形成の様子、住居と家系図の色が対応している

１．第二世代の富裕化と「コンパウンド」の形成

本章では、タイの社会・経済、居住者の経済状況の変容に伴う「コンパウンド」の形成を考察する（図 5）。

バンコクの都市化と社会関係の拡大は、大きく 2 つの時期に分けられる。第 1 の時期は、1960 年代から 1990 年代前半の工業化の進展期である。1958 年のサリット政権下で経済成長が進み、地方からの人口流入が加速した。「コンパウンド」ではタイ東北部から第一世代の B 氏が移住し、その後甥や姪である G 氏、J 氏、K 氏を呼び寄せた。第 2 の時期は、1990 年代後半から 2010 年代後半の産業構造の変化と経済成長の時期である。1997 年のアジア通貨危機を契機に、労働集約型の製造業から金融・商業・サービス業へとシフトし、スラムのさらなる拡大がみられた。「コンパウンド」では、2000 年代以降に第三世代の流入や結婚、出産が進み、社会関係が急速に拡大した。

社会関係の拡大に伴い、近隣に複数の住居を購入または賃貸できる場合「コンパウンド」が形成される。本研究対象地では、G 氏(55)と H 氏(51)夫妻の富裕化に伴い、居住地の拡大がみられた。G 氏は靴修理と大工、H 氏は雑貨屋を営み、世帯収入は約 4 万 7 千バーツに達する。タイの中間層は世帯収入 3 万バーツ以上とされ、G 氏夫妻は中流階級に分類できる。彼らの収入源はいずれもインフォーマル経済に属するが、技術や高い初期投資が必要なため参入障壁が高く、安定した収益を得ていると考えられる。特に 2000 年代初頭のタクシン政権期には月 10 万～20 万バーツを稼ぎ、周囲に貸付を行うほどの余裕があった。G 氏夫妻は富裕化に伴い、住居 01 および住居 07～10 を購入している。住居 01 は 1990 年代前半に 10 万バーツで購入し、2023 年には住居 07～10 を 8 万バーツで取得した。

２．居住実態：スラム荒廃を防ぐメカニズム

「コンパウンド」は、外部空間での多様なアクティビティを誘発し、スラムを荒廃させない内的な要因として働いている。本章では、湾曲路地、外部空間での日常的行為、社会関係の集積の 3 点に焦点をあて、住環境向上のメカニズムを明らかとする。

湾曲した路地形状は、バイクの速度を低下させ、視線のズレを生じさせることで、「コンパウンド」を領域化する。対象地の路地は幅 800～1,400 ㎜ほどで、3 か所で折れ曲がっている（住居 08 前、住居 06 前、その中間）。東南アジアではバイクが重要な交通手段であり細い路地においても多くのバイクが行き交うが、湾曲路地では速度を落とさざるを得ない。また、住居間の視線が交差し、住居群に一体感を生まれる。一方で、住居 06・08 より先の路地は視線が届かず、湾曲路地に囲まれた空間が領域化される。

湾曲路地による領域化に加え、各住居前面での活発な日常的行為と、それに適した空間形成により、外部空間が領域化されていた。路地や住居前面は誰でも通行・視認可能な開放空間でありながら、住民によって共用のリビングのように利用されていた。

特に住居 01・02 前面は増改築されており、飲食、調理、ダンス、靴修理、休息などが日常的に行われていた。住居 01 と 02 の間に設置された庇や、雑貨屋開店のための商品棚や窓、また住居 01 前面のベンチと住居 02 前面のテラス（3,030×1,130×100 ㎜）が、住居内部・外部を合わせて一体的に空間を形成している。

一方、住居 03～05 前面では、椅子やパラソルが置かれ、談笑、散髪、調理、屋台開店などが見られた（図 8、図 9）。これらの住居は支援住宅であり住居前面の

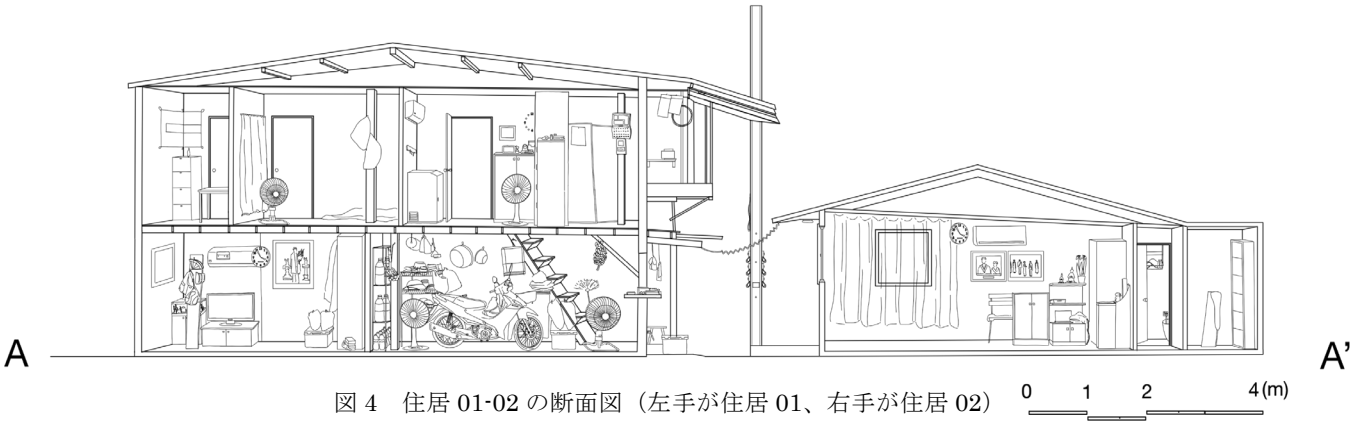

図 4　住居 01-02 の断面図（左手が住居 01、右手が住居 02）

図 5　平面図、図 3 の家系図と色が対応している

図 6　住居 01-02 の前面空間

増改築がみられないが、住居と路地の間の 1,000～1,500 ㎜の隙間が多様な活動の場となっている。また、路地境界に設置された水道管が約 120 ㎜の微高地を生み、バイクの侵入を抑え、行為をしやすい空間となっていた。

これまで述べた物理的要素に加え、親族や友人が近隣に集住していることが、スラムの荒廃を防ぐ内的要素として機能していた。具体的には、犯罪抑止や子育ての補助、互助的な就労支援や金銭の貸し借りが挙げられる。

インタビューで居住地の良し悪しを尋ねると、ほぼ全員が「*親族や知人が近い*」「*親族や知人が面倒を見てくれる*」といった人間関係に関する回答をした。一方で、薬物問題や盗難を悪い点として挙げた住民も多かった。これらの回答から、地域全体への評価は必ずしも高くないが、親族や知人が集住することにはメリットを感じていることが分かる。例えば、住居 03 の M 氏（58）は「*ここなら 2～3 日家を空けても物はなくならない。他の場所なら 10 日で全部なくなる*」と話す。また、住居 05 の W 氏（42）は妻が出て行った後、男手一つで 2 人の子どもを育てており、「*薬物やケンカが嫌いな所。子どもが自由に遊べる範囲を K 氏の家から FF 氏(「コンパウンド」の範囲)の家までに制限している*」と述べた。この地域では共働き世帯が多く、安全性や子どもを見守る存在が重要視されている。また、住居 01 の雑貨屋のような、住居にいながら営業できる職業も地域の安全性向上に寄与している。

さらに、職業技術の継承、稼得機会の提供、金銭の貸与においても、社会関係が大きな役割を果たしている。本対象地では、第一世代の B 氏が孫の G 氏に靴修理の技術を伝えた。現在も G 氏の兄弟 J 氏(52)、G 氏の姪である T 氏(39)がその技術を受け継いでいる。

また、「コンパウンド」に居住することは就業機会の提供にもつながる。例えば、G 氏の靴修理を息子の AA 氏(28)が手伝って日銭を稼ぐほか、大工の仕事においても、親戚の T 氏、K 氏(49)や、親戚ではないが M 氏らが日給をもらい手伝う様子が観察された。別の例として、住居 07 の P 氏（47）は無職だが、住居 02

に一人暮らしする E 氏（73）の住居を掃除する等し、日銭を得ている。「コンパウンド」がセーフティネット的な役割を果たしている事例とも言えるだろう。

３．第三世代の富裕化と「コンパウンド」の解体

本章では、第二世代とは質の異なる第三世代の富裕化と、それに伴い今後「コンパウンド」で起こる変化を予測する。

第三世代では、自営業ではなく企業に勤めながら富裕化する傾向がみられた。例えば、Y 氏(35)、S 氏(42)、U 氏(28)は同じ会社で氷運搬の仕事をし、1 万 6 千～2 万バーツの給料を得ている。Z 氏は大学を卒業し、会計の仕事で月 3 万バーツを稼ぎ、V 氏はコンピューター関連の仕事で月 1 万 5 千バーツを得ている。一方、T 氏は靴修理や市場の荷物運びといった自営業で収入を得ており、これは第二世代に見られる特徴と共通する。彼らは夫婦で合わせて月に 3 万バーツ以上稼いでおり、こうした第三世代の富裕化の背景には、タイの経済成長や高等教育の普及、親世代の安定した収入が影響していると考えられる。

彼らは現居住地に居続けたいとしながらも、将来的な移住を検討している。例えば Z 氏は「*職場に近いためこの近辺に住みたい。しかし、いつかは父母が年寄りであるため実家に戻りたい。*」と述べており、収入の 12％を貯蓄しながらピックアップトラックを購入済みである。また、T 氏は「*この場所に居住したい。（立ち退き等で）どこにも移動したくない。しかし（現在タイ東北部に建設中の）家が完成したらそちらに移住する。*」と述べる。このように、第三世代の中流階級に属する人々にとって「コンパウンド」は仕事と生活に適した場所であるが、生涯の居住地とはならない。彼らの移住により、配偶者や子どもも同時に移動し、「コンパウンド」の解体が進むことが予測される。

一方で、この場所へ居住し続けることを希望する層もいる。例えば、富裕化した第二世代の G 氏、H 氏夫妻は、住居を購入済みであり、近年の収入減少や貯蓄不足等の理由により移住を望んでいない。また、低所得層の中には、G 氏や H 氏らと共に移住することを希望する者もいる。W 氏は「*彼らの近くにいたい。子の面倒を見てくれるからだ*」と述べる。単身で子育てをする彼にとって、近隣関係は重要である。また、P 氏は「*選択肢がなく、ここに居続けるしかない。立ち退きになれば、近隣住民と移動したい*」と話す。

このような状況を踏まえると、「コンパウンド」は解体が進むと予想される。第二世代は 50 代に入り、多くが収入減少に直面している。新型コロナウイルスの影響も大きく、仕事量は回復していない。かつては金を貸す立場だった G 氏も借金を抱えるようになり、地域ではインド人の金貸しが頻繁に回収を行っている。M 氏の妻 N 氏は 2023 年に住居 03 に流入したが、2024 年に姿を消した。M氏は、「*アイツは借金が返せなくなったのさ。nii nii(この場所から逃げたんだよ)。*」と住居 02 前面のテラスでウイスキーを飲みながらニヤリと答えた。

タイの経済成長は鈍化し、「コンパウンド」では 2020 年以降、出産は LL 氏の事例のみである。一方、高齢者や子育てを終えた夫婦の流入が目立つ。少子高齢化や晩婚化の進行を考えると、今後もこの傾向が続くと予測される。その結果、貧困化が進み、近隣での住居の確保が難しくなり、地域内で分散して住むケースが増える。これにより、「コンパウンド」は解体に向かい、外部空間での活発な日常活動や犯罪抑止力が弱まり、スラムの荒廃が進む可能性が高い。

４．おわりに

本研究は、バンコクのスラムにおいて親族が近接した住居において共住する「コンパウンド」の動態を明らかにすることを目的とした。「コンパウンド」の形成には、第二世代の富裕化が大きく影響した。1960 年代以降の工業化に伴い地方からの人口流入が進み、第二世代が靴修理等の仕事で成功し、住居を複数所有することで親族が集まり、居住環境が拡大した。こうした環境は、スラムの荒廃を防ぐ要因となっていた。湾曲した路地がバイクの速度を抑え、視界のズレが一体感を生み、住居前面空間が日常的に活用されていた。また、親族や友人との互助関係により、犯罪抑止や就業支援、経済的援助のネットワークが築かれ、安全性が保たれていた。

しかし、第三世代の富裕化により「コンパウンド」の解体が進む。中流階級となった第三世代は、職場の利便性から生産年齢期にはスラムに住むが、貯蓄が進むと移住を検討する。一方、第二世代や低所得者層は社会関係維持のため残留するが、収入の低下や借金の増加により生活が困難化している。さらに少子高齢化により新たな世帯形成が減少し、最終的に世帯群の分散とスラムの荒廃が進むと考えられる。

参考文献

1) 遠藤環：都市を生きる人々,京都大学学術出版会, 2011

2) Askew, M. : Bangkok Place, Practice and Representation, Routledge, 2022

3) 水野浩一：タイ農村の社会組織, 創文社, 1981

4) 末廣昭, タイ　中心国の模索, 岩波書店, 2009